

部活動が与える自己効力感への影響

——達成場面と人間関係に着目して——

横井 彩奈 (東京大学教育学部)

◆ 要約

- ◎本稿では、学校生活の中で部活動に焦点を当て、部活動形態や取り組み方によって自己効力感がどのように影響するかを検証する。
- ◎部活動において、達成場面の多さは自己効力感に影響を与えている。達成場面が少ない生徒は、自分の能力に対して自信が持てず、自己効力感は低い。
- ◎達成場面の少なさによって自信を持てずにいる生徒は、先輩・後輩や顧問の先生といった異年齢の人間関係によって自己効力感を補完することができる。
- ◎だが、文化部においては一概に結論づけることはできず、その活動内容の質的差から、より細かく分類した分析が必要だといえる。

1 問題設定

本稿の目的は、部活動の取り組み方が自己効力感（自分の能力に対する自信の程度）に与える影響を明らかにすることである。部活動は、スポーツや文化活動など、学校教科を超えた、生徒の興味・関心を主題とした活動であり、多くの中学生にとって学校生活にとどまらず日常生活においても大きな位置を占めている。また、異年齢集団を形成したり、教師による指導を受けたりする、多様な特徴や幅広いつながりを持つ活動の場である。そこで達成感や人間関係による影響を受けて、どのように自己効力感が変化するかを分析する。

近年、青少年の自信のなさ、自己効力感の低さが問題視されている。自己効力感とは、心理学者のAlbert Banduraによって提唱された心理学用語で、自己に対する信頼感や有能

感のことである。心理学では、意欲ややる気を「動機づけ」と名づけて研究が進められているが、教育にかかわる動機づけに関する研究のうち、自己効力感に関する研究が増大している¹⁾ (金子・守 2001)。自己効力感は、学習領域との関連で調べたものが最も多く、保健や健康についての教育と自己効力感との関連を調べたものや、職業選択や進路選択との関連を調べたものもあり、この他にも多様な分野において中学生を対象とした自己効力感研究が行われている。これらの研究により、自己効力感を向上させるために有効な具体的活動としては、進路に関するキャリア教育や社会学習体験、その他にも生徒のよい成果を紹介することで意欲を高めるといった工夫のされた授業スタイルが挙げられている。これらの例から、教育課程外の活動ではあるが、中学生の生活の大きな部分を占める部活動の取り組みによって、自己効力感を向上させる

ことができるのではないかと考えられる。それでは、どういった環境で、どういった要因によって、自己効力感は向上するのか。また、自己効力感が低い状況でも、それを打破するような働きがあるのか。本稿ではこれらの点について検証する。

2 先行研究の検討

実際の中学生の部活動加入率の現状について、西島らによる2001年3月に行われた、1都6県の中学校2年生を対象とした調査では、全体では部活動への加入率は87.8%である。学校によっては全生徒に部活動への加入を義務づけているが、それでも加入率が100%でない場合もある。また、同調査で部活動にどのくらい力を入れているかを尋ねたところ、「かなり力を入れている」が39.4%、「まあ力を入れている」が39.7%で、ほぼ8割が部活動に積極的にかかわっていることがわかった。さらに、神奈川県教育委員会教育局保健体育課（2009）によると、中学校体育連盟の平成20年度調査では、神奈川県内では公立中学校生徒約19万9千人に対し、64.3%にあたる約12万8千人が運動部に入部しており、その性別による内訳は、男子では75.4%、女子では52.2%であった。

自己効力感についての先行研究は多いが、それと部活動を結びつけたものはあまり見当たらない。その中で、西島（2006）は学校の諸場面に対するコミットメントと生徒の自己評価との間には有意な関係がみられ、学業成績とは独立して、コミットメントする場面が多くなるほど自己評価も高くなる傾向がある、と指摘している。だがそれは必ずしも部活動だけによる効能ではなく、またその自己評価については学業成績に関するものである。他にも、授業に対する意識や態度と部活動の経験などの関連で、部活動の経験があるほうが授業に対して積極的に取り組む（高旗ほか 1996）ことや、学校生活の意識や態度と部活動の経験との関連で、運動部加入者は、

積極性、自己表現、学校への満足度などが高いことがわかっている（吉村・坂西 1994）。

このように、学校適応と部活動の関係についてはいくつかの研究が見られ、学年を超えクラスを超えて、積極的かつ自由に参加を希望する生徒によって構成される部活動は、通常の教育課程での活動では得難い、幅広く深い対人関係や集団活動経験を積む重要な機会となり、生徒の人格形成や適応感育成においてその教育効果が期待できるといわれている（高野・橘川 2008）。また、運動部において、ライフスキルの獲得に関しては、レギュラー生徒のほうが非レギュラー生徒よりもライフスキルの得点が高いことなども研究されている（井伊 2007）が、今後の部活動の在り方や中学生の人間関係の方向性については検討の必要性があり、また、部活動の種類や部活動内での人間関係を分類したものは見当たらなかった。

3 仮説

- 理論仮説1：部活動をしている生徒は、自己効力感が高い。
- 作業仮説1：部活動をしている生徒は、自分の能力に対して自信を持っている。
- 理論仮説2：部活動に積極的に取り組んでいる生徒ほど、自己効力感が高い。
- 作業仮説2：部活動に力を入れて頑張っている生徒ほど、自分の能力に対して自信を持っている。

これまで、自己効力感と部活動を結びつけた研究はなされていなかったため、この2つの関連をまずみる。両者の間に関連があるならば、熱心に取り組んでいる生徒ほど自己効力感が高いと予測される。

- 理論仮説3：部活動における人間関係の良好な生徒ほど自己効力感が高いが、それは部活動に積極的に取り組んでいる生徒ほど

顕著である。

- 作業仮説3-1：先輩・後輩と仲の良い生徒ほど、自分の能力に対して自信を持っているが、それは部活動に力を入れて頑張っている生徒ほど顕著である。
- 作業仮説3-2：顧問の先生とよく話す生徒ほど、自分の能力に対して自信を持っているが、それは部活動に力を入れて頑張っている生徒ほど顕著である。

部活動は、通常の教育課程での活動では得難い、幅広く深い対人関係や集団活動経験を積む重要な機会となり、生徒の人格形成においても適応感育成においてもその教育効果には期待できるといわれている（高野・橘川2008）。そこで、部活動内の人間関係に着目して、その関係が生徒の取り組みの熱心さによってどう影響するのかをみる。ここで同輩を人間関係の中に入れていないのは、異年齢交流が、部活動と学級の活動の特徴をより明確に分ける要素の1つと考えられるからである。

- 理論仮説4：運動部に入っている生徒は、文化部に入っている生徒に比べて、自己効力感が高い。
- 作業仮説4：運動部に入っている生徒は、文化部に入っている生徒に比べて特に自分の能力に対して自信を持っている。

運動部は勝ち負けがはっきりと決まる活動内容なので、そこで成功経験のある生徒は、自己効力感が高いと予測される。一方、文化部は勝ち負けの決まる活動内容のものもあれば、芸術性の高い内容のものもあるので、運動部ほど自己効力感は高くないのではないかと予測される。

- 理論仮説5：運動部に入っている生徒は自己効力感が高いが、それは部への貢献度の高い生徒ほど顕著である。
- 作業仮説5：運動部に入っている生徒は自分の能力に対して自信を持っているが、そ

れは今自分が部において役に立っていると思っ
ている生徒ほど顕著である。

運動部において、ライフスキルの獲得についてはレギュラー生徒のほうが非レギュラー生徒よりも得点が高い（井伊2007）という研究があることから、レギュラーであるかどうかは運動部では達成場面として1つの重要な要素であると考えられる。それ以外にも、役員を務めていたり、何かしら部に貢献している生徒ほど自己効力感が高いと予測される。

- 理論仮説6：運動部において、部への貢献度が低くても、部活動における人間関係の良好な生徒は自己効力感が高い。
- 作業仮説6-1：運動部において、今自分が部において役に立っていると思っ
ていない生徒でも、先輩・後輩と仲の良い生徒は自分の能力に対して自信を持っている。
- 作業仮説6-2：運動部において、今自分が部において役に立っていると思っ
ていない生徒でも、顧問の先生とよく話す生徒は自分の能力に対して自信を持っている。

部に貢献できる生徒は限られているが、それ以外の生徒は自己効力感が一律に低いのだろうか。達成場面に恵まれない生徒の自己効力感を底上げする要因として、人間関係に着目し、部内の関係が良好な生徒においては自己効力感も高いと予測した。

- 理論仮説7：文化部に入っている生徒も、部への貢献度が自己効力感に違いをもたらす。
- 作業仮説7：文化部に入っている生徒も、今自分が部において役に立っていると思っ
ている生徒ほど、自分の能力に対して自信を持っている。

文化部は、運動部よりも活動内容の幅が広い
ため、一括りにして特徴を捉えづらく、先行研究でも文化部について扱っているものが

見当たらない。囲碁や将棋といった大会のあるものや、吹奏楽や合唱といったコンクールのあるものなど、勝ち負けの決まる活動が含まれる一方で、演劇や園芸、茶道といった勝ち負けの決まらない文化活動も含まれる。だが、活動を行う上で達成場面は自分の能力を認識する上で1つの重要な要素だと考えられるので、運動部と同様に文化部においても、何かしら部に貢献している生徒ほど自己効力感が高いと予測される。

- 理論仮説 8**：文化部において、部への貢献度が低くても、部活動における人間関係の良好な生徒は自己効力感が高い。
- 作業仮説 8-1**：文化部において、今自分が部において役に立っていると思っていない生徒でも、先輩・後輩と仲の良い生徒は自分の能力に対して自信を持っている。
- 作業仮説 8-2**：文化部において、今自分が部において役に立っていると思っていない生徒でも、顧問の先生とよく話す生徒は自分の能力に対して自信を持っている。

運動部と同様に、達成場面に恵まれない生徒の自己効力感を底上げする要因として、人間関係に着目し、部内の関係が良好な生徒においては自己効力感も高いと予測した。

4 変数の設定

- ①「自己効力感」：Q50A「自分には人よりすぐれたところがある」とQ50C「自分に自信がある」を合計し、 $9 - (Q50A + Q50C)$ で計算して、4～7点を「高い」、1～3点を「低い」と割り当てた。なお、信頼性分析のアルファ係数は0.674なので合算に問題はない。また、重回帰分析では1～7の連続変数として用いた。
- ②「部活動熱心」：仮説3において、Q15A「部活動に力を入れてがんばっている」という質問項目を、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」として2段階に設定し用いた。
- ③「人間関係が良好」：Q15D「部活動の先輩・後輩と仲がよい」という質問項目を、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」として2段階に設定し用いた。また、重回帰分析では「あてはまる」を1、「あてはまらない」を0に割り当て、ダミー変数として用いた。
- ④「顧問の先生とよく話す」：Q15E「部活動の顧問の先生とよく話す」という質問項目を、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」として2段階に設定し用いた。また、重回帰分析では「あてはまる」を1、「あてはまらない」を0に割り当て、ダミー変数として用いた。
- ⑤「貢献度」：Q15B「自分は部に対して何か役に立っていると思う」という質問項目を、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」として2段階に設定し用いた。また、重回帰分析では「あてはまる」を1、「あてはまらない」を0に割り当て、ダミー変数として用いた。
- ⑥「女子ダミー」：Q02A「性別」の質問項目で、「男」を0、「女」を1としてダミー変数を作成し、重回帰分析で用いた。
- ⑦「学力スコア」：Q09の1～10を加算して、0～10の簡易学力スコアを設定し、連続変数として重回帰分析で用いた。
- ⑧「所有財スコア」：Q30の1～8を加算して、0～8の所有財スコアを設定し、連続変数として重回帰分析で用いた。

5 分析

作業仮説1を検証しているのが表1である。これより、部活動をしているか否かで自己効力感に違いはみられないので、理論仮説1は支持されない。単純集計表より約9割の生徒が部活動をしていることから、単純に部活動をしているかどうかではなく、その取り組み方が自己効力感に違いをもたらすのではないかと推測される。また、表2では、部活動形態によって自己効力感の高低にはっきりと差があらわれることが示されている。運動部の生徒は自己効力感が高いが、一方で文化部の生徒は自己効力感が低くなっていることがわかる。よって、これは理論仮説4を支持する

ことになる。

次に、作業仮説2を検証する。この結果を示したのが表3である。これより、Q15A「部活動に力を入れてがんばっている」に「とてもあてはまる」と答えた生徒が特に自己効力感が高いことがわかる。よって理論仮説2は支持された²⁾。

また、上述のように、運動部か文化部かによって自己効力感が大きく異なるので、以後、この2つを区別して分析することにする。

表4より、運動部においては、部活動に熱心だと答えた生徒の中で、先輩・後輩と仲が良い人ほど自己効力感が高いことがわかる。熱心ではない生徒も、10%水準の有意差ではあるが先輩・後輩関係が自己効力感に違いを

表1 部活動×自己効力感

部活動	自己効力感		合計	N
	高い	低い		
入っている (%)	49.4	50.6	100.0	(2528)
入っていない (%)	48.5	51.5	100.0	(274)
合計 (%)	49.4	50.6	100.0	(2802)

Q14_3×Q50A・C
有意差なし p=0.776

表2 部活動形態×自己効力感

部活動形態	自己効力感		合計	N
	高い	低い		
運動部 (%)	52.2	47.8	100.0	(1876)
文化部 (%)	41.5	58.5	100.0	(656)
合計 (%)	49.4	50.6	100.0	(2532)

Q14_1・2×Q50A・C
0.1%水準で有意 p=0.000

表3 部活動熱心×自己効力感

部活動熱心	自己効力感		合計	N
	高い	低い		
とてもあてはまる (%)	57.8	42.2	100.0	(1086)
まああてはまる (%)	43.3	56.7	100.0	(991)
あまりあてはまらない (%)	43.2	56.8	100.0	(317)
まったくあてはまらない (%)	42.1	57.9	100.0	(133)
合計 (%)	49.5	50.5	100.0	(2527)

Q15A×Q50A・C
ガンマ係数：0.223 0.1%水準で有意 p=0.000

もたらしていることがわかる。一方、表5より、文化部においては、部活動に熱心な生徒もそうでない生徒も、先輩・後輩と仲が良いかどうかで自己効力感の間には有意な関連はみられない。

次に表6より、運動部においては、熱心な生徒もそうでない生徒も、顧問の先生と話す生徒ほど自己効力感が高いことがわかる。一方、表7より、文化部においては、熱心な生徒のみ、顧問の先生と話すことで自己効力感が高くなっている。

よって、表4～7より、理論仮説3は運動部においては全体的に支持され、文化部においては部分的に支持された。運動部の生徒は、熱心に取り組む生徒もそうでない生徒も、部

内の人間関係の良好な生徒ほど自己効力感が高い。特に、熱心な生徒は先輩・後輩との関係、熱心でない生徒は顧問の先生と話すかどうか、自己効力感に強く影響していることがガンマ係数からわかる。一方、文化部の生徒は、熱心に取り組む生徒においてのみ、顧問の先生と話すかどうかで自己効力感に影響を与えている。

5.1 運動部における分析

では、運動部に絞って、その取り組み方や環境と自己効力感の関係をみていく。作業仮説5を検証しているのが表8である。これを見ると、ガンマ係数も高く³⁾、運動部においては貢献度が自己効力感に大きな影響を与え

表4 部活動熱心×先輩・後輩×自己効力感

分析対象は運動部の生徒 Q15A×Q15D×Q50A・C

部活動熱心	先輩・後輩仲良し	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	55.3	44.7	100.0	(1393)
	あてはまらない (%)	36.1	63.9	100.0	(180)
	合計 (%)	53.1	46.9	100.0	(1573)
				ガンマ係数：0.372	0.1%水準で有意 p=0.000
あてはまらない	あてはまる (%)	52.4	47.6	100.0	(164)
	あてはまらない (%)	42.1	57.9	100.0	(126)
	合計 (%)	47.9	52.1	100.0	(290)
				ガンマ係数：0.206	10%水準で有意 p=0.080

表5 部活動熱心×先輩・後輩×自己効力感

分析対象は文化部の生徒 Q15A×Q15D×Q50A・C

部活動熱心	先輩・後輩仲良し	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	44.5	55.5	100.0	(431)
	あてはまらない (%)	41.3	58.7	100.0	(63)
	合計 (%)	44.1	55.9	100.0	(494)
				ガンマ係数：0.067	有意差なし p=0.625
あてはまらない	あてはまる (%)	37.1	62.9	100.0	(62)
	あてはまらない (%)	30.9	69.1	100.0	(97)
	合計 (%)	33.3	66.7	100.0	(159)
				ガンマ係数：0.137	有意差なし p=0.421

表6 部活動熱心×顧問の先生×自己効力感

分析対象は運動部の生徒 Q15A×Q15E×Q50A・C

部活動熱心	顧問の先生	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	56.8	43.2	100.0	(1049)
	あてはまらない (%)	45.5	54.5	100.0	(534)
	合計 (%)	53.0	47.0	100.0	(1583)
				ガンマ係数：0.223	0.1%水準で有意 p=0.000
あてはまらない	あてはまる (%)	61.4	38.6	100.0	(83)
	あてはまらない (%)	42.8	57.2	100.0	(208)
	合計 (%)	48.1	51.9	100.0	(291)
				ガンマ係数：0.361	5%水準で有意 p=0.004

表7 部活動熱心×顧問の先生×自己効力感

分析対象は文化部の生徒 Q15A×Q15E×Q50A・C

部活動熱心	顧問の先生	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	48.3	51.7	100.0	(319)
	あてはまらない (%)	36.7	63.3	100.0	(177)
	合計 (%)	44.2	55.8	100.0	(496)
				ガンマ係数：0.233	5%水準で有意 p=0.013
あてはまらない	あてはまる (%)	38.6	61.4	100.0	(44)
	あてはまらない (%)	31.3	68.7	100.0	(115)
	合計 (%)	33.3	66.7	100.0	(159)
				ガンマ係数：0.160	有意差なし p=0.380

表8 貢献度×自己効力感

分析対象は運動部の生徒 Q15B×Q50A・C

貢献度	自己効力感		合計	N
	高い	低い		
あてはまる (%)	61.1	38.9	100.0	(1073)
あてはまらない (%)	40.3	59.7	100.0	(799)
合計 (%)	52.2	47.8	100.0	(1872)
			ガンマ係数：0.399	0.1%水準で有意 p=0.000

ていることがわかる。よって理論仮説5は支持される。

貢献度が高い生徒は自己効力感も高いが、全員が部へ貢献できるとは限らない。そうした際に、貢献度が低い生徒の自己効力感を底上げする要因は何か。それを検証したのが表9、表10である。貢献度が高い生徒と低い生徒に分けて、それぞれについて人間関係が

どのように影響しているかを示している。これより、貢献度が低い生徒においてのみ、先輩・後輩と仲が良かったり、顧問の先生と話したりするなど、部内の人間関係が良好である場合、自己効力感が高いことがわかる。この結果より、貢献度の低い生徒の底上げ要因が人間関係にあるとあってよい。よって、理論仮説6は支持された。

表9 貢献度×先輩・後輩×自己効力感

分析対象は運動部の生徒 Q15B×Q15D×Q50A・C

貢献度	先輩・後輩仲良し	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	61.5	38.5	100.0	(990)
	あてはまらない (%)	57.3	42.7	100.0	(75)
	合計 (%)	61.2	38.8	100.0	(1065)
ガンマ係数：0.087 有意差なし p=0.474					
あてはまらない	あてはまる (%)	43.4	56.6	100.0	(564)
	あてはまらない (%)	32.6	67.4	100.0	(230)
	合計 (%)	40.3	59.7	100.0	(794)
ガンマ係数：0.227 5%水準で有意 p=0.005					

表10 貢献度×顧問の先生×自己効力感

分析対象は運動部の生徒 Q15B×Q15E×Q50A・C

貢献度	顧問の先生	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	62.4	37.6	100.0	(779)
	あてはまらない (%)	57.9	42.1	100.0	(292)
	合計 (%)	61.2	38.8	100.0	(1071)
ガンマ係数：0.094 有意差なし p=0.177					
あてはまらない	あてはまる (%)	45.5	54.5	100.0	(352)
	あてはまらない (%)	36.2	63.8	100.0	(447)
	合計 (%)	40.3	59.7	100.0	(799)
ガンマ係数：0.189 5%水準で有意 p=0.008					

表11 貢献度×自己効力感

分析対象は文化部の生徒 Q15B×Q50A・C

貢献度	自己効力感		合計	N
	高い	低い		
あてはまる (%)	51.8	48.2	100.0	(307)
あてはまらない (%)	32.5	67.5	100.0	(345)
合計 (%)	41.6	58.4	100.0	(652)
ガンマ係数：0.382 0.1%水準で有意 p=0.000				

5.2 文化部における分析

次に、文化部に絞って、その取り組み方や環境と自己効力感の関係をみていく。作業仮説7を検証しているのが表11である。これを見ると、ガンマ係数も高く⁴⁾、運動部と同様に文化部においても貢献度が自己効力感に大きな影響を与えていることがわかる。よって理論仮説7は支持された。

では、文化部において達成場面に恵まれな生徒の自己効力感を底上げする要因として、人間関係は効いているのであろうか。それを検証したのが表12、表13である。運動部と同様に、貢献度が高い生徒と低い生徒に分けて、それぞれについて人間関係がどのように影響しているかを示している。ここで有意な結果が得られたのは、貢献度が高い生徒に

表 12 貢献度×先輩・後輩×自己効力感

分析対象は文化部の生徒 Q15B×Q15D×Q50A・C

貢献度	先輩・後輩仲良し	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	52.0	48.0	100.0	(275)
	あてはまらない (%)	51.6	48.4	100.0	(31)
	合計 (%)	52.0	48.0	100.0	(306)
ガンマ係数：0.008 有意差なし p=0.967					
あてはまらない	あてはまる (%)	33.0	67.0	100.0	(215)
	あてはまらない (%)	31.0	69.0	100.0	(129)
	合計 (%)	32.3	67.7	100.0	(344)
ガンマ係数：0.046 有意差なし p=0.699					

表 13 貢献度×顧問の先生×自己効力感

分析対象は文化部の生徒 Q15B×Q15E×Q50A・C

貢献度	顧問の先生	自己効力感		合計	N
		高い	低い		
あてはまる	あてはまる (%)	56.9	43.1	100.0	(204)
	あてはまらない (%)	41.7	58.3	100.0	(103)
	合計 (%)	51.8	48.2	100.0	(307)
ガンマ係数：0.296 5%水準で有意 p=0.012					
あてはまらない	あてはまる (%)	34.6	65.4	100.0	(156)
	あてはまらない (%)	30.7	69.3	100.0	(189)
	合計 (%)	32.5	67.5	100.0	(345)
ガンマ係数：0.089 有意差なし p=0.438					

おいての、顧問の先生と自己効力感との関連のみである。したがって、文化部において貢献度の低い生徒は、人間関係によっては自己効力感が底上げされないことがわかった。これより、理論仮説8は支持されない。

文化部において自己効力感との間に関連がみられるのは、熱心度や貢献度といった部活動への取り組み方や達成場面の有無であり、そうした取り組みや達成が順調な生徒においてのみ、顧問の先生と話すかどうかによって自己効力感に違いがあらわれている。先輩・後輩と仲が良いかどうかという指標はあまり自己効力感に影響を与えていない。これは運動部ほど上下関係が活動に反映されていないからであろうか。文化部は、「スポーツ」と一言で括れる運動部と違い、活動内容に質的差が大きく、年齢による序列がつきにくい。

そのため、先輩・後輩との関係が自己効力感と結びつかなかったのではないかと推測される。

最後に、自己効力感に影響を及ぼすと想定される性別⁵⁾や学力、階層の変数を統制してもなお、部活動の効果があらわれるかを確認するために、重回帰分析を行う。

表14がその結果である。「性別」「学力スコア」「所有財スコア」を統制変数に加えて分析を行った。やはり性別の影響は大きく、女子ダミーの標準化偏回帰係数は-0.181と大きな値である。だが、それに次いで貢献ダミーの標準化偏回帰係数が0.177と高い数値である。学力スコアの標準化偏回帰係数も高く、やはり学力の影響は強いことがわかるが、それでも部活動において貢献することは自己効力感に強い影響があることが読み取れる。ま

表 14 自己効力感の規定要因（重回帰分析）

独立変数	偏回帰係数	標準化偏回帰係数
女子ダミー	-0.489	-0.181 ***
先輩・後輩ダミー	0.132	0.038 +
顧問の先生ダミー	0.182	0.066 **
貢献ダミー	0.482	0.177 ***
学力スコア	0.071	0.135 ***
所有財スコア	0.052	0.066 **
(定数)	2.746	
決定係数		0.130
調整済み決定係数		0.128
モデル適合度		p=0.000
N		2483

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

た、部活動内における人間関係で、先輩・後輩ダミーが有意な結果が得られなかった。クロス表では有意な差がみられたが⁶⁾、重回帰分析では有意な規定要因としてはみなせないことが明らかになった。

6 結論

これまでの分析結果をまとめると、部活動にただ単に取り組めば自己効力感も高くなるとはいえないことがわかる。部活動の種類や取り組み方によって、自己効力感に違いが生まれる。運動部と文化部を比較した場合、運動部の生徒のほうが自己効力感が高い。だが、運動部の生徒が一概に自己効力感が高いとは言いきれず、そこには部への貢献度の影響がある。部の役職についていたり、レギュラーメンバーであったりなど、部への貢献が高い生徒は相対的に自己効力感も高い。能力があり、それを周りに認められることはやはり自己効力感を高めることになる。だが、実際には貢献度が低い生徒も存在する。今回の分析では、そうした部への貢献度が低い生徒は、部内の人間関係によって自己効力感が補完される可能性を示すことができた。部に対して貢献度が低いと感じていても、先輩や後輩から自分の存在を認められたり、指導を受ける

顧問の先生に自分の存在を認められたりすることで、貢献していなくても部に居場所ができる。スポーツは勝ち負けがはっきり決まるが、その結果や果たした役目だけで自分の能力に自信を持つわけではない。結果が良くなくても、部活動に参加し、周りの人間から認められることによっても自信をつけることができるようになった。

一方、文化部は運動部よりも分析が困難であった。そもそも、「文化部」という括りでは一口に言えないほど、その活動内容は多様である。吹奏楽部や合唱部はコンクールに出場することもあるであろうし、どちらかといえば運動部の性格を持っている。囲碁部や将棋部もそうした勝負をする部である。だが、園芸部や茶道部といった勝負の世界とは離れた部も「文化部」として扱われている。その点が、今回の分析の限界であり、運動部ほどははっきりとした特色や結果は得られていない。だが、それでも文化部においても、貢献度という達成場面をたくさん持つ生徒ほど自己効力感が高く、達成感を得られにくい生徒は自己効力感が低い。問題は、運動部と違って、文化部においてそうした達成場面が少なくして自己効力感の低い生徒は、部内の人間関係によっては自己効力感を補完することができていない点である。活動内容にもよるが、運動

部ほどチームプレイに重点を置いていないため、生徒自身の取り組みやその達成による効力感が大きく、部内の人間関係が良好であっても自己効力感が底上げされていない⁷⁾。

以上より、運動部と文化部によって違いはあるものの、部活動は、活動に取り組む中で、達成場面や人間関係の影響を受けながら、自己効力感を高めることができる場であるとい

える。だが、部活動の効用は一様ではなく、どの生徒にとってもいい影響を与えるとは言い切れない。その効用は、生徒が部活動に何を求めているかによって異なり、学校に対する価値観が多元的に存在することを示唆する。その多元性を明らかにするためにも、今後の課題としては、文化部をより正確に分類して分析することが必要であろう。

<注>

- 1) 今回のデータで分析すると、学校の勉強を積極的にする、学校が楽しい、学校生活に満足している、日常生活が充実している、といった変数と自己効力感に相関がみられた。
- 2) なお、理論仮説2は、運動部と文化部に分けて分析しても、有意な結果が得られた。どちらにおいても、積極的に部活動に取り組む生徒ほど自己効力感が高いといえる。
- 3) 運動部において、自己効力感との関連について有意な結果が得られた変数のガンマ係数を比較すると、部活動熱心度変数(4件法)が0.203、先輩・後輩変数が0.321、顧問の先生変数が0.245であり、貢献度変数の0.339が最も大きい。
- 4) 文化部において、自己効力感との関連について有意な結果が得られた変数のガンマ係数を比較すると、部活動熱心度変数(4件法)が0.220、先輩・後輩変数が0.179、顧問の先生変数が0.255であり、貢献度変数の0.382が最も大きい。
- 5) 自己効力感と性別の相関関係をみると、男子は自己効力感が高く、女子は逆に低い。
- 6) 注3、注4を参照。
- 7) ちなみに、文化部の生徒について、部活動以外の場面においては、熱中しているものがあつたり、保護者とよく会話したりしている場合に、貢献度の低い生徒の自己効力感が底上げされていた。こうした生徒というのは、部活動自体はそれほど重視しておらず、居場所の1つとして文化部に参加しているのかもしれない。

<引用文献>

- 井伊明日香、2007、「運動部活動参加におけるライフスキル獲得の特徴——中学生用ライフスキル自己評定尺度の開発を通じて」『大阪体育大学紀要』38: 144.
- 神奈川県教育委員会教育局保健体育課、2009、「『学校の特色となる運動部活動』実践事業 実践報告書——参加促進・地域連携・競技力向上による学校の特色づくり」(<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/hokentaiiku/bukatu/houkoku.html#2>, 2010.7.30).
- 金子重成・守一雄、2001、「動機づけに関する心理学的研究の動向——ERICを用いた計数的分析」『教育実践研究：信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』2: 45-54.
- 西島央、2006、「移行期における中学校部活動の実態と課題に関する教育社会学的考察——全国7都県調査の分析をもとに」『中等教育における部活動の実態と機能に関する実証的研究』平成13～16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書7:39.
- 高旗正人・北神正行・平井安久、1996、「中学生の『向学校性』に関する調査研究」『岡山大学教育学部研究集録』102: 249-58.
- 高野玲子・橘川真彦、2008、「中学生における学校適応感に影響する要因(5)——部活動適応感について」『日本教育心理学会総会発表論文集』50: 314.
- 吉村斉・坂西友秀、1994、「学校生活への満足度と部活動との関係(2)」『埼玉大学紀要 教育学部(教育科学Ⅱ)』43: 53-68.